「東日本大震災」被災支援 NEWS No.45 2012.10.7（隔週配信）
〒330－0844 さいたま市大宮区下町 3－39　関東教区事務所　kantou@desk.email.ne.jp　発行者　飯塚拓也

# 第 4 回関東教区被災支援委員会報告

小池　正造（被災支援委員）

10 月 1 日大宮教会を会場に、支援委員会が行われました。

各報告が行われました。金刺主事より、会計報告がなされ、6 教会より教区被災支援委員会へ献金があったことが報告されました。

栃木地区にあるアジア学院では、食堂兼ホールである新コイノニア棟と教室、図書館、会議室などのある教室棟が完成し、9 月 22 日に新コイノニアハウス・教室棟奉献式　～故丹羽章前理事長を覚えて～が行われました。教区三役は、宇都宮教会を問安し、新会堂の建設計画を伺いました。また、佐野教会も問安しました。

ボランティア担当小林委員より、10 月 29 日から 11 月 2 日にかけてのボランティア派遣について報告がなされました。仙台エマオを拠点にボランティアを行います。現在 7 名の参加希望者があります。希望される方は、小林委員(取手伝道所)まで、ご連絡ください。

教団教育委員会より、被災地の子どものためにとおくられた献金について、教会関係幼児施設に贈ることにしました。調査の結果、16 教会に配分することになりました。

被災地で祈りに覚える旅について、参加希望者が多い場合の対応を検討しました。被災地で生活されている方々に配慮し、定員は増やさないこととし、別の機会を設けることにした。なお、10 月 1 日時点での残席は 4 名となりました。お申し込みはお早めにお願いいたします。申込先は、新井純委員(十日町教会)までお願いいたします。支援ニュース 44 号別紙に概要・旅程、申し込み用紙が、ありますのでお用いください。

## 東北教区被災者支援センター・エマオだより

支援センター･エマオでは､｢寄り添い｣＝｢スローワーク｣と｢お祈り｣を大切に､ずっと繋げてきています。

～祈りの課題～

- 二度目の秋を迎えようとしています。避難生活を余儀なくされている方々、特に高齢の方、しょうがいと共に歩む方、こどもたちの健康が守られますように。
- これまで支援センターの働きを支えてくださったスタッフ 3 名が、それぞれの持ち場へ戻ります。中長期のワーカー、新たなスタッフが与えられますように。
- 収穫の秋を迎えています。大地の実りを感謝するだけでなく、それぞれの働きに応じて、あるいはそれを超えて与えられた収穫を思い起こし、改めて感謝できますように。

東北教区被災者支援センター・エマオ
〒980-0012　仙台市青葉区錦町 1-13-6　Tel022-265-0173　Fax022-265-0174
E-mail　tohoku.uccj.volunteer@gmail.com

## 「継続することの難しさ」

小林祥人（取手伝道所牧師）

「継続する」ということがあります。どんな場面でも基本的なことでありながら、実際には意外なほど難しいのがこの「継続」です。もしも「継続」が途切れ、被災地に生きる方々が「(自分たちは）忘れ去られてしまったのでは」という心細さを感じ始めるなら、復興への道のりはますます険しいものになってしまうでしょう。

被災者支援センター・エマオが展開しているボランティア活動も、参加者が減少しているそうです。すなわち「継続することの難しさ」が垣間見えるところに、関東教区からも参加させていただきましたが、その際私たちに考えられるのは、長く続けられるものにすること、被災地の方々への負担が極力少ないこと、できれば「関東からは必ず来てくれる」という安心感を少しでも与えられるようにすること、などの課題でしょう。

## 「仙台荒浜でのボランティア活動について」

倉田茂満（取手伝道所）

7 月 24 日エマオボランティアセンターに朝集合し、青年男女が手と手を結び輪になってお祈りをした。台湾と韓国からの人々も通訳を通して、今日のスケジュールの説明があった。6 班に分散し作業場に自転車で 14 キロの道のりを走った。わたしが一番年配者と思うが、幸い電動自転車が配備され疲れることなく農家に辿りついた。所属チームは新潟の教会の先生と東京の女子大生と 3 人で、津波で畑にもぐり込んだ礫を金網のふるいで除去し石灰を撒いて畑を整地した。枯れた松の木を細かく切ったり汗が噴き出た。昼は持参のおにぎりを食べ、農家の夫妻が収穫されたいんげんをおいしくいただいた。

農家の主人が海岸までと車で案内してくださった。「私の実家はここです」と指さされた所はコンクリートの土台だけだった。「200－300 人の死体が積み重なっていた」ことや、国道わきの幅 100 メートルの松林が数十キロも続いていて、道路を通るトラックや乗用車は林が遮り、海があることも知らず走っていて「突然の津波で車ともに流され車が山となっていた」ことを話された。突然の事件は心の準備がされていないと大きな事故を引き起こす事を改めて思い知らされた。

## 「こども達の笑顔が消えないために」

綾　文子（鹿島幼稚園）

ボランティアを通して、沢山の石巻のこども達と出会わせて頂き感謝の気持ちで一杯です。仮設の商店街の一区画で出会ったこども達は、友達との触れ合いを楽しんでいる姿が印象的で、生きる力が満ちているように感じました。震災から一年五ヵ月が過ぎようとしていますが、復興にはまだまだ長い時間が掛かります。こども達の笑顔が消えないためには人と触れ合う楽しさを感じ、生きがいを見つけていく場所が大切だと痛感しました。その場を提供し続けているエマオのボランティアの方々に大きな敬意を感じます。私もこのボランティアに一日のみの参加ではありましたが､同じ時間を共有させて頂けたことを心から有り難く思っています。

“何か手助けをしたい”という思いは、震災直後に比べるとどうしても薄れてしまいます。石巻で出会ったこども達の笑顔、そして震災を忘れず、これからも自分にできることを心に留めて日々の生活を送っていきたいと思います。

＊この頁は、「茨城地区だより(号外版)」2012 年 8 月 31 日号」から引用したものです。